

<書評>

宋美蘭 編著

『韓国のオルタナティブスクール—子どもの生き方を支える「多様な学びの保障」へ』

明石書店 2021年2月

山田泉（元法政大学）

本書は、タイトルのように韓国におけるオルタナティブスクール（代案学校）について数校の事例の紹介を中心として、このような学校が生まれ、伸展してきた社会的背景を分析し、解説しているものである。比較の意味からか、あるいは似たような状況を提示するためからか、1校だけだが日本の高等学校の取り組み事例の紹介と背景への言及がある（第5章）。それぞれの学校関係者へのインタビューも含めた丁寧な事例報告がなされている。学校設立の理念、背景にある社会状況による変遷、その経緯まで詳細に記述している。さらに、最終章（第8章）では、卒業生の一人から聞き取りをし、卒業後の社会への接続の問題を指摘している。

文字どおりオルタナティブスクール（代案学校）は、公教育における一般の学校に代わるもう一つの学校のあり方を模索するものだが、評者はその存在理由は大きく分けて二つあると考える。その一つは、現在の社会のあり方およびその社会の構成員としてふさわしい資質・能力を養成する教育観の双方を批判し、より人間として望ましい生き方が可能な社会を構築する資質・能力を養成しようとする教育観に由る学校である。これに対してもう一つは、教育環境を問題とし、子どもがクラスメイトや先生などとの人間関係や自己肯定感の持てない学校生活による不登校等に対処するために必要とされる公教育、学校外の居場所としてのものである。日本のフリースクールの活動などは、後者の場合が多いと思われる。本書で扱っている代案学校は、主に前者に属するものと考えられる。もちろん、両者は互いに影響し合ったり複合したりすることもある。

本書の章立ては、序章、第Ⅰ部（第1,2章）、第Ⅱ部（第3,4,5,6章）、第Ⅲ部（第7,8章）および「おわりに」となっている。

序章では、韓国における学ぶ意味を失った「無重力」の子どもたちが生まれる背景を、80年代、90年代、2000年代それぞれの社会状況との関係から述べている。それと関係づけて日本の不登校の状況について言及している。それを受けて韓国のオルタナティブスクール（代案学校）の急速な広がりとそのに対する研究者の分析等を紹介し、公教育の教育内容の変革の必要性を指摘している。90年代からのグローバル経済の下で経済的価値を優先する競争原理の社会が学校教育に強く反映していることの問題性と人の生き方を追求しそ

れに資する社会のあり方を学びの中心に据えるもう一つの学校（オルタナティブスクール、代案学校）創造を目指す活動について述べている。本書は各部、各章においてそれらを掘り下げて述べている。

第Ⅰ部では、第1,2章に分けて、韓国の代案学校が生まれ、広がり、分化していく歴史的・社会的な文脈を解説するとともに制度的・法的根拠・実際の教育課程・カリキュラム内容を明らかにしている。第Ⅱ部の第3章から第6章は、実践報告を中心に都市部、農山村部それぞれの代案学校の取組を、教育理念から取り上げて示している。第5章は、ソウル市のアルムダン学校（中学、高校）と日本の北海道北星学園余市高等学校を対照し論じている。双方とも不登校やいじめ経験者が多いということだが、生徒たちへのインタビューをもとに学校の特徴を記述している。両校の共通点としては、生徒が中心の学習活動を生徒自身が協働して作り上げる中から、生きていく上での人と人との関わりの大切さを実際に体験しながら学んでいることが挙げられよう。関わりの相手としては、親や教師だけではない「第3の大人」の存在の重要性を指摘している。両校の違いと思われるのは北星学園の生徒がよく使う言葉として「素をだせる」があるということだ。日本社会および学校文化が個人が全体に合わせることを強いていて、一般の社会では子どもといえども自分の素直な思いを口に出せないものになっていることが分かる。人間関係構築で最も重要なものは互いに素のままに関わりながら相手を理解し、ともに受け入れていくことだと思われる。「みんな違ってみんないい」意識での人間関係構築だとも言える。第Ⅲ部の第7章は農村共同体活動と代案学校の関係性を述べているが、まさに本書で紹介している韓国における代案学校の活動は、現状の社会のアンチテーゼとしてのもう一つの社会像、人と人が共に関わり共に生きる「共同体」の再生を目指した社会の創造とそのための教育、学校のあり方を問うものだという事だろう。しかし、最終第8章では、代案学校卒業生の生の声を通じて、代案学校の取組みによって培った資質、能力が現実の市場原理の下での競争社会で発揮することの難しさを訴えている。しかし前途が多難であっても、あるいは、多難であるからこそ、代案学校の取組みが社会に訴えるものは大きく、韓国の教育行政でさえ、現状の教育をよりよく変えていくためのもう一つの教育のあり方を模索し、これら代案学校の取組みを注視している。その現れが、「制度内学校」（認可校）としての代案学校の存在だと考える。

評者は上記で代案学校の存在意義を大きく二つに分けられるとしたが、入り口のニーズこそ若干の違いがあっても、二つは共通部分が多い。いかなる学校での教育においても、教育内容や方法は、そこで生きていく人々が選択する生き方とそれを実現するための社会のあり様と不可分だということだ。かつ子どもたちの発達という面を考えると、いずれの教育にも学ぶ主体である子どもに対しても、養成する資質・能力の内容としても、福祉的視点が重要だからである。

本書でのオルタナティブスクール（代案学校）の取組み紹介は、日本を含め多くの国

で教育とは何かを考え、国の公教育の具体的なあり方を考えるための問題提起として貴重な示唆を与えるだろう。しかし、韓国のオルタナティブスクール（代案学校）は、まだ点としての存在に過ぎない。これらの取り組みが一般社会に評価され、数の上でももう一つの教育として併置されるまでには、学校創設と併せて、関係者による一般社会への粘り強い啓発活動が必要なことを指摘しておきたい。